文化力のある地域は滅びない

―西表島の石垣金星さんとの出会い

お互いの人生の一部となった半世紀のつきあい

安渓 遊地・安渓 貴子

https://ankei.jp
a@ankei.jp

結論　未来へむけた歴史実践のために
西表島をほり・おこしつづけた、石垣金星さん（西表をほりおこす会）に学ぶこと

0．ここが世界の中心。交流と情報発信

1．地域を「ほる」と「おこす」のバランス

2．住民と地域研究者が手を結ぶ可能性

3．伝統に学んで芸能と祭りを再創造

西表をほり・おこすという歴史実践をともに創ってきた半世紀から未来へ

- 地域研究――地域に学び、地域を愛し、地域に返す

安渓遊地編『西表島の農耕文化――海上の道の発見』法政大学出版局、2007年

安渓遊地編『廃村続出の時代を生きる』南方新社、2017年

石垣金星『西表島の文化力―金星人から地球人へのメッセージ』南山舎、2023年

宮本常一・安渓遊地『調査されるという迷惑・増補版』みずのわ出版、2024年

伊谷純一郎先生（人と自然の関係研究）

I. 大切なことはみんな島がおしえてくれた

A. コミュニケーションの力さえ身に着けておけば、あとは地域がおしえてくれる

① 「地域が学校、地元が先生」をたたき込まれた

ⓐ 地域でのフィールドワークが面白そうだと思って大学院をめざした

- いろいろな道を経て研究をめざすあなたや、初めて大学院での教育を経験するあなたへ
- 大学がいやになって川喜田二郎氏の移動大学運動に参加——寝たきり学生から蒸発学生へ
- 移動大学の目標：人間性開放・研究即教育、教育即研究・地域を教科書に・雲と水と……
- 専門にこりかたまらないで、軽々と越境する——今西錦司らの京大学派の力の源泉

ⓑ 『高崎山のサル』『ゴリラとピグミーの森』の伊谷純一郎氏の教えを受ける

- みんなのやっていることならやらない——伊谷純一郎のフィールドワークのスタイル
- ある全体を覆うように網をかけなさい——holismの教え
- 誰も手を付けていない空白をみつけなさい——すきま産業宣言
- 深く掘れ、岩盤に届くまで——パイオニアになるために

② わかりやすい日本語を書き、いろいろな言葉で伝え合う

- 日本語の実用文としての論文が書けるまで丁寧に添削を繰り返すのが伊谷スタイルの指導
- 五感をフルに生かして体得したものを、わかりやすく咀嚼して表現

かじったことば

- ラテン・西表・スワヒリ・ソンゴーラ・仏・英・スペイン・オランダ・バスク・アイヌ…

もちろん年に何百冊かの本はよむ

1926-2001

サバニ金星号を駆る金星人。1974年

フィールドは廃村鹿川（かのかわ）

やぶの中はダニとツツガムシの巣窟

最寄りの船浮村までは道なき道を8時間

下手でいいからやってみる（参与観察）

干立のガジャン荘　山野我山　と号す

LE PACIFIQUE

ガジャン荘の家主　1988年8月

金星人の歩み（1946−2022）

0　中学校で島を出る

1 教員から島おこし運動家へ

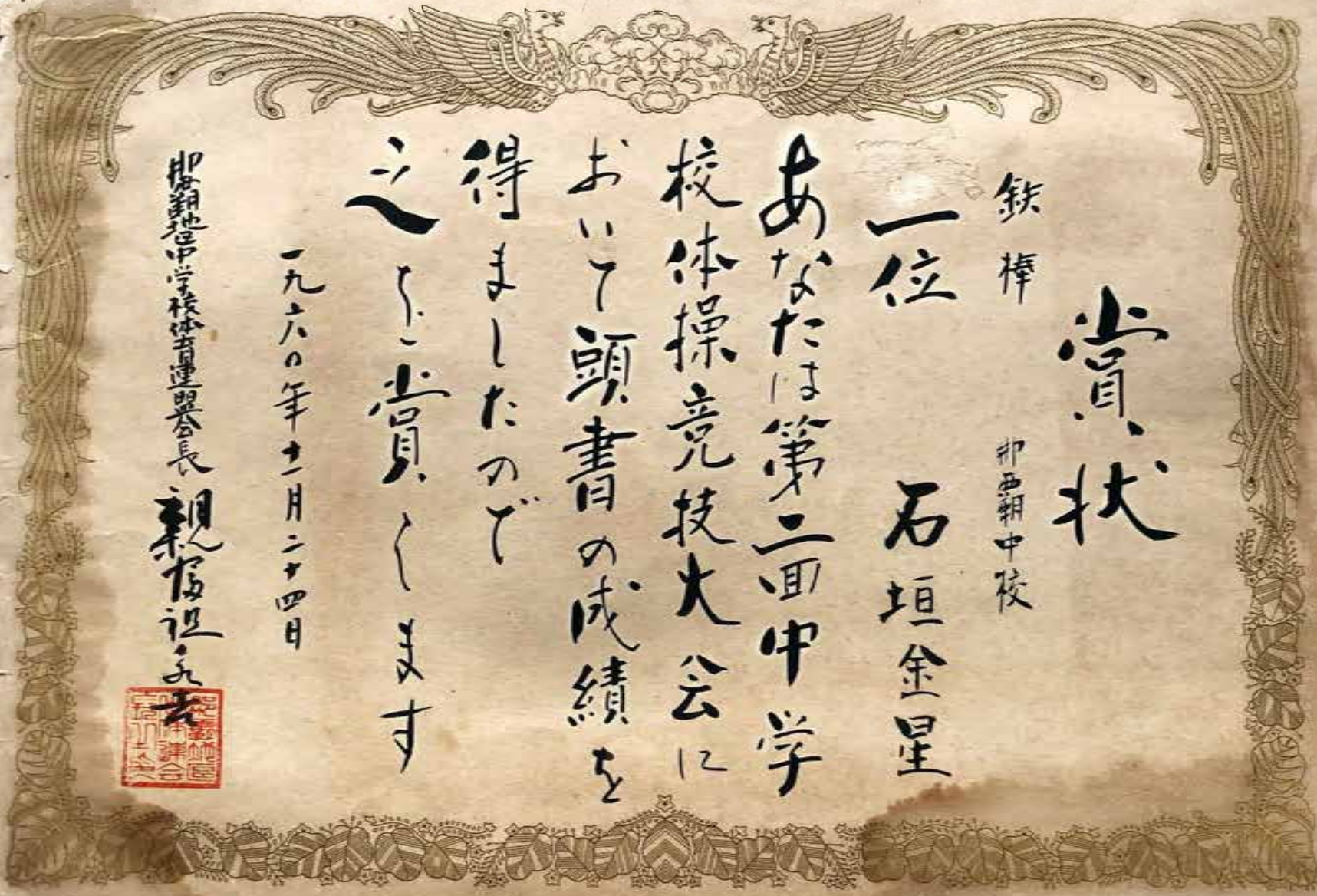
2 大企業と役所に噛みつく日々

3 竹富乙女を迎える

4 西表をほり・おこす

5 円熟の晩年へ

Q. 山川海を駆け回るヤマガッコウ → 身体能力



賞状

鉄棒

一位

那覇中校

石垣金星

あなたは第二回中学校体操競技大会において頭書の成績を得ましたのでこゝに賞します

一九六〇年十二月二十四日

那覇地区中学校体育連盟委員長 親泊祖元

賞状

首里高等学校
石垣金星

鉄棒
一位

第九回体操競技大会
に於て最善をつくし
頭書の成績を得た
のでその栄誉を賞する

一九六三年一月十三日

沖縄高等学校体育連盟会長 仲田豊順

沖縄高等学校体育連盟長印

人は話せばわかる
鉄棒は放せばわかる

順天堂大学
卒業
恩師澤口進
先生の口癖
「本を読め」

１西表中学校の体育教員

(1) 1版 第24794号 (1968年2月2日第3種郵便物認可)

沖縄の顔

仲間と共に情熱燃やす

石垣金星 村興しリーダー

この人の家を"ガジャン"(蟹)荘"という。ガジャンのように夜になると、三三五五若者たちが集まってくるからだ。農業、青年会活動について語り合う。酒をくみかわしながら三味線に合わせて歌い踊る。若者たちの唯一の"広場"である。

七年前、那覇の中学教員から希望して故郷の西表小中学校へ赴任。とりわけ過疎化で衰退する農業、本土企業に買い占められた大大十地を目のあたりにして、七年間の教員生活にすんなりバイバイ。農業に取り組む。若者たちを中心にした"村興し運動"のリーダーである。

三年前に比べターン青

1．島おこしの時代

琉球新報・沖縄の顔1978年5月26日

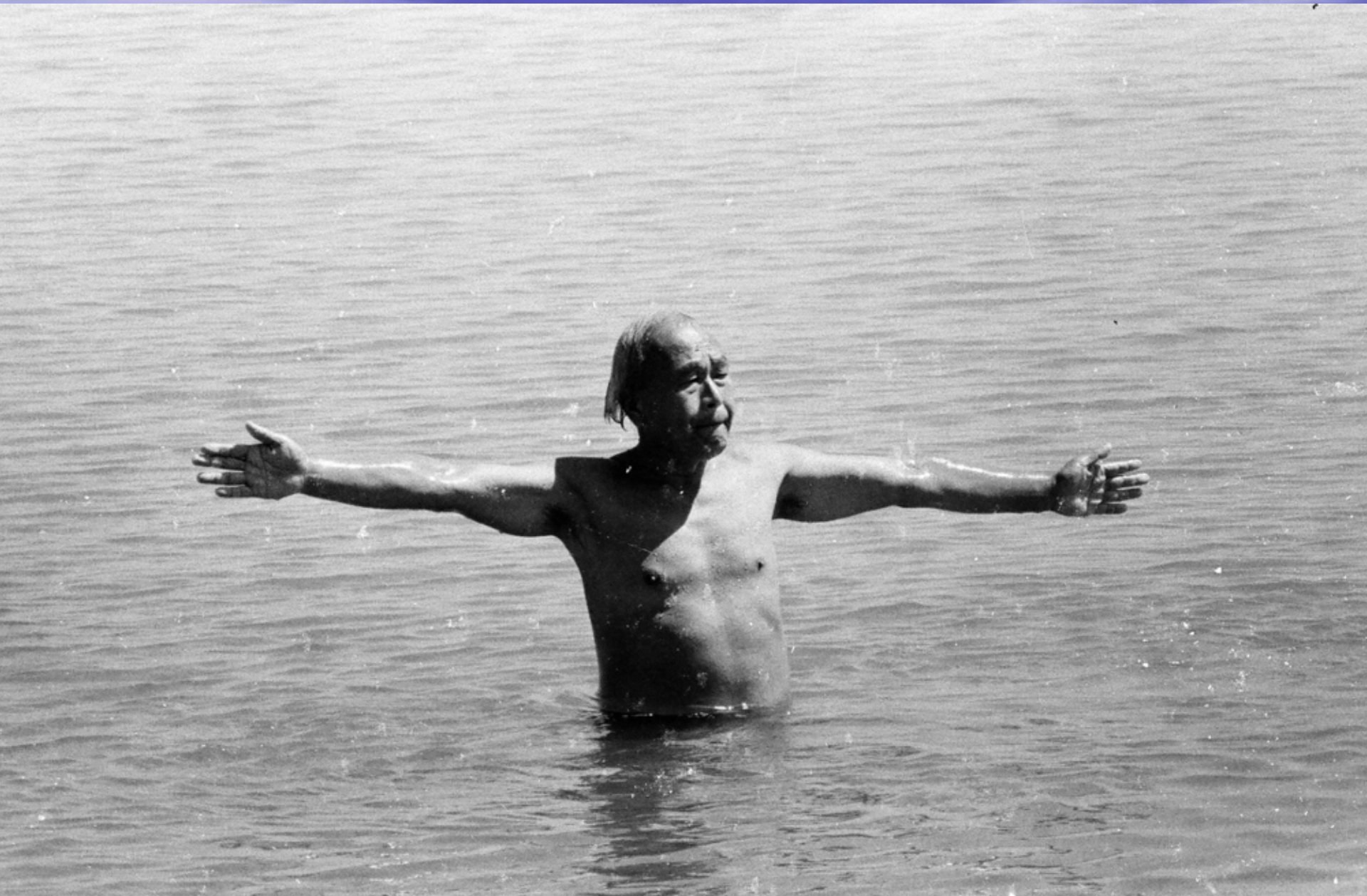
復帰とともに西表島に帰った私がまずはじめにしたことは、途絶えた青年会活動を復活させることでした。骨董品目当ての墓荒らしを止めさせ、大企業の土地買い占めを止めさせて、島を守る運動にとりかかりました。祭で島に帰る若者達へ「島を守るために帰ってこい！」と酒を汲みつつ口説きました。「おまえたちが帰ってきたら教員辞めて一緒にがんばるから」と……。

それから三年目にして青年達が帰ってきました。約束どおり教員を辞め、青年達と共に今にも倒れかかった西表島をいかに立て直すかということから「島おこし運動」と名づけられました。

西表島から島おこしを考える（石垣金星）

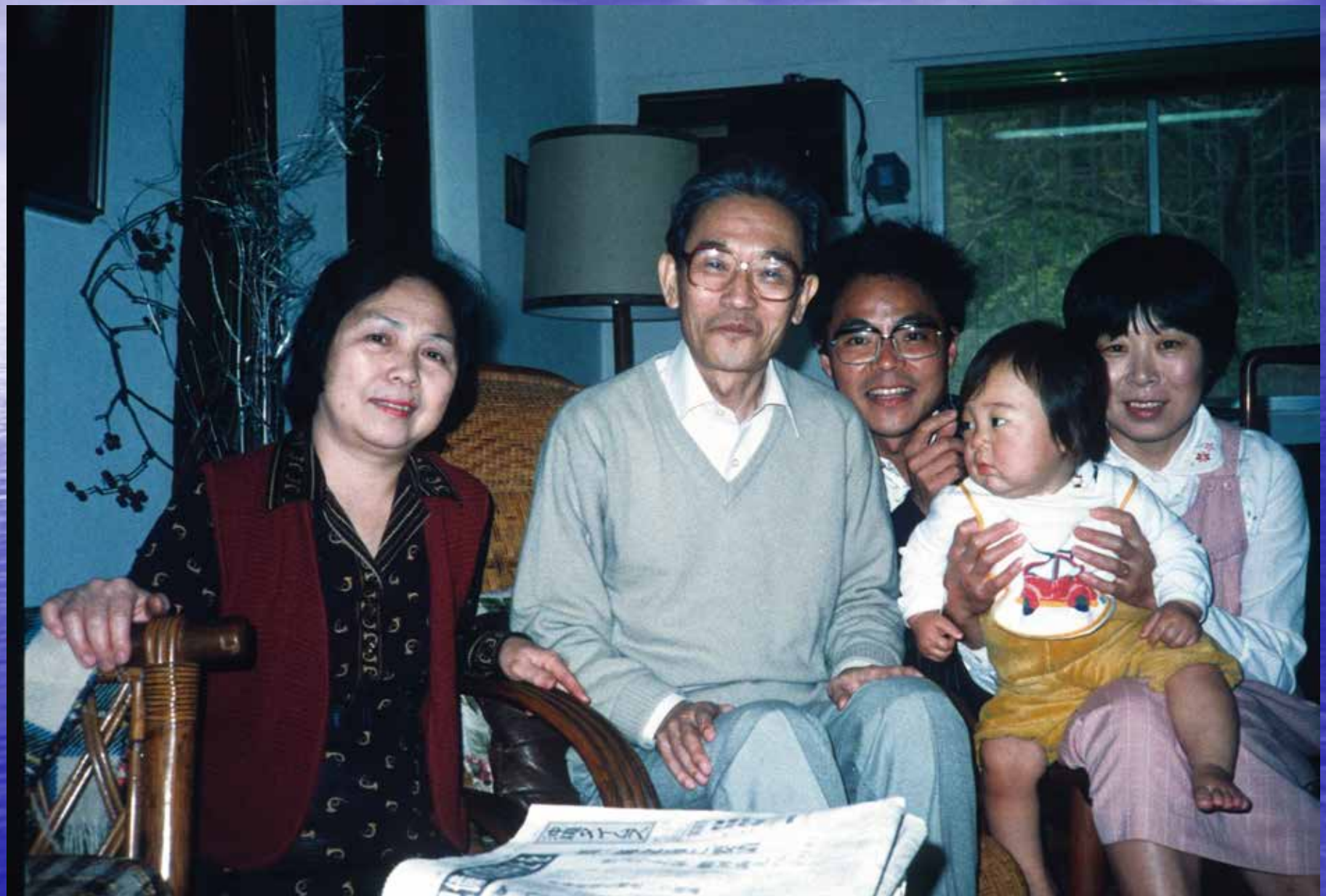
　１９７９年第１回沖縄・西表シマおこし交流会議は西表島祖納から始まった。そのきっかけをつくり、推進役として志なかばで故人となられた忘れることができない恩人たちをまず冒頭で紹介しておきたい。下田正夫先生（元西表診療所医師）、吉田嗣延先生（元沖縄協会専務理事）、玉野井芳郎先生（元沖縄国際大学教授）の３人の先生方である。そして玉野井先生と共に私どもの島おこし運動の後ろ楯となられ暖かく見守っていただいた方に現在法政大学学長の清成忠男先生がいます。。

西表の子どもらに海での安全を教える下田正夫医師



吉田嗣延（1910-1989）財団法人沖縄協会・専務理事　沖縄出資のもと外務官僚

玉野井芳郎(1918-1985)経済学



2 大企業と役所に噛みつく日々

唐獅子

カゲキ派

石垣金星

1981.9.19
沖縄タイムス

「カゲキ派」的に生きることをモットーとし、西表のカゲキ派の一人である私は、こよなく愛する島酒に酔いしれることに激しく燃える。震天動地の情念は、ほとばしり「カゲキ派」へと変身する。日本のカゲキ派がゲバ棒を手にする過激派ならば、われらウチナーのカゲキ派はサンシンを手にするウタと踊りの「歌劇派」である。

数多いウチナーの歌劇派のなかで大好きな一人である北島角子オバーのウチナームヌガタイにたくましく生きるウチナー女の姿を見ることができ、心を打たれる。また、八重山民衆の生きざまをうたいあげる大工哲弘のシマウタは、祖先の叫びとして深く心に伝わってくる。なかでも超歌劇派といえる喜納昌吉のウタは、現代のウチナー民衆が忘れかけようとしている大切なにかをわれわれに問いかけ、ウマイ、スバラシイとかの常識的わくに収まりきれない天性的な迫力でもってウチナーンチュの魂を動かさずにはいない。

長き支配と搾取の歴史において、われらウチナー民衆はウタと踊りに明日への希望を託し、平和を求め、生きる喜びとしてたくましく生き抜いてきた。それら多くの民衆が詠んだ島ウタには、ウチナー民衆の魂の叫びと生きざまとして一貫して平和を願う民衆の思いが香り高く詠いあげられている。多くの島ウタのなかでイクサを賛美したウタを一つとして聴いたことはない。あの忌まわしいオキナワ戦の灰じんの中にあってもウタ、サンシンは民衆の明日への希望として心の大きな支えとなってきた。復帰十年目の今日、沖縄はアメリカ軍、日本軍の占領下にあり、平和を求めるウチナー民衆の願いとは逆に基地機能は強化されつつある。われらは平和を求める民衆の魂

公民館を宿として借りたいという某大学生物学クラブへFAX

調査地ヒガイについて

- 島の私どもは研究者のための調査など全く望んでおりません。みどりあふれる西表島へは毎年、何十人・何百人にものぼるバカセがやってきます。私どもが調査されたことについて調査したところ、何と一五〇〇にも近い報告書が出ていますが、アアービックリ、そのほとんどが島に還元されないまま。私どもからみるとそれは、研究に名を借りた単なるドロボウです。そのような研究とか学問とかいうカビの生えたモノは、人畜有害でしかありません。これからの生物学研究にとって大きな一つの命題とされるべきでしょう。

激烈な言葉と大切な気づき

④役にもたたん生物学研究などいらん！

- 　島における生物は全て島人と互いに話をしながら生きているのです。そして私たちが大切に養ってきたのです。

調査地被害（宮本常一、1972）

渋沢敬三（しぶさわ・けいぞう）先生の教え

1. 他人に迷惑をかけないこと

2. でしゃばらないこと

3. 他人の喜びを心から
   喜びあえること

宮本常一先生

練習問題――フィールドでの接近遭遇

島の家に招かれてお酒を飲んでいると、1時間ほどして近所のおじさんがやってきました。

いきなり、私（当時23歳）にこう決めつけます。

「おまえは、廃村調査とか偉そうなことを言ってるが、本当の目的はなんだ？墓をあばいて副葬品を盗む手引きでもしてるんだろう！

こいつらはだませても俺の目はごまかせんぞ」

そこで質問です。正解はわかりません。

かなり酔っておられる、こわそうなこのおじさんに、あなたならなんと答えますか？

レポートなどは地元の人にチェックしてもらえば安心

できるだけ
家族で
おつきあい

3.竹富乙女を迎える

朝日新聞一九八一

朝日新聞　1981年（昭和56年）9月17日　木曜日

沖縄を語る

石垣金星さん

熱帯養蚕に生きる道

老人や女性の仕事にも

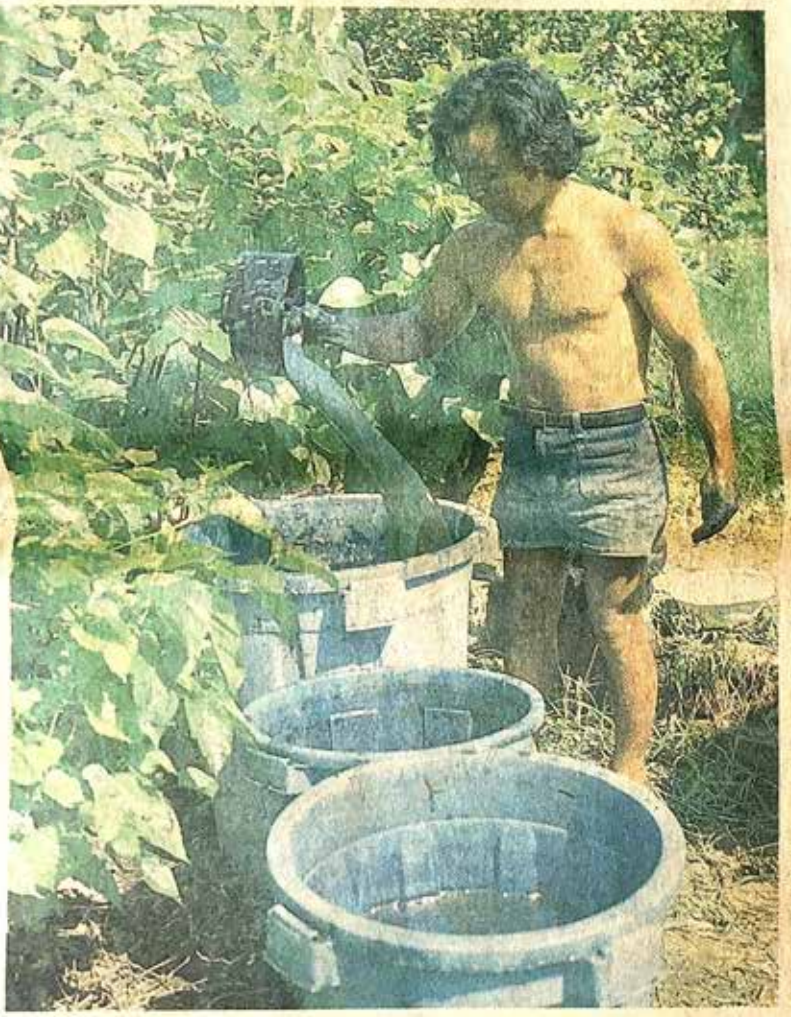
「衣食の自給自足で自立の基礎固め。着ている着物は、妻（左端）との共同作品」という石垣さん（中央）　＝西之表島で

「衣食の自給自足で自立の基礎固め。着ている着物は、妻（左端）との共同作品」という石垣さん（中央）　＝西之表島で

第3種郵便物認可　1981.12.3　琉球新報

地方版

ニュース、催しなどお知らせ下さい
中部支社報道部 ☎(09893)7-9768 7-4612
具志川支局 ☎(09897)2-3593
嘉手納支局 ☎(09895)6-2711
石川支局 ☎(09896)4-2133
宜野湾支局 ☎(09889)2-3350



シマの工芸復興へ

藍染め

石垣金星さん
竹富町星立九五九

シマの自立、シマおこしを唱える石垣金星さん（竹富町星立九五九、西表島）は失われつつある手作り工芸の復興を目指す実践家でもある。現在、藍（あい）作りに取り組んでいる。藍の原料はインドアイと琉球アイの二種、主にインドアイが使われている。

五年ほど前から染織に取り組んだ石垣さんは、竹富島、小浜島で染織をしている老ばあちゃんたちから技術を学んだ。

インドアイの和名はナンバンコマツナギ。十一―十二月ごろ小さな花を咲かせ、種子は春三月ごろまく。あとは勝手にスクスクと生長、背丈ほど伸びた畑が収穫時期。刈り取っても芽が出る生命力のある草だ。

藍作りの手順を簡単に紹介すると、まず収穫した原料の葉を容器にキュー詰めにし、ひたひたになるまで水を入れる。一昼夜放置すると、水は

紅露工房の前で海晒しをする二人

略奪・独占から分かち合いへ

- 私たちの米は山の水と太陽と雨の恵みをいただいて完全無農薬でつくった米だから、ヤマネコちゃんも安心してエサを食べにきます。除草に頑張るアイガモの半分はヤマネコのご馳走となるけれど、ヤマネコ印の名義使用料として、好きなぶんだけあげている。人間も生活に困らないだけいただく。恵みを分けていただいてありがとうという感謝の気持ちを、西表の言葉で「バーミィートーリヨー」（私の分を分けてください、の意味）と言います。

人間の力をはるかに越える台風の力

水がこなくて枯れ果てた水田

田植え後の寒さで曲がって枯れた稲

不幸は未然に予防する

田植え時期には曲がった食べ物を食べないこと

時をわきまえずにうたってはならない歌

雨乞いの歌をうたうと、きっと大雨になります（田盛雪さん）

金星人のことば（映画・生々流転）

西表に「自然保護」という言葉はもともとないわけよ。自然な恵みを減らさないように、どうすればいいのか。その答えは三〇年先に出てくる。伝統というのは、その自然の恵みを減らさないようにする知恵のことであるわけよ。まつりごとも行事もすべてそう。

人間もこの自然の中で生きている生き物のただひとつにしかすぎない。ということを西表に来たら、いやがおうでも感じないといけない。

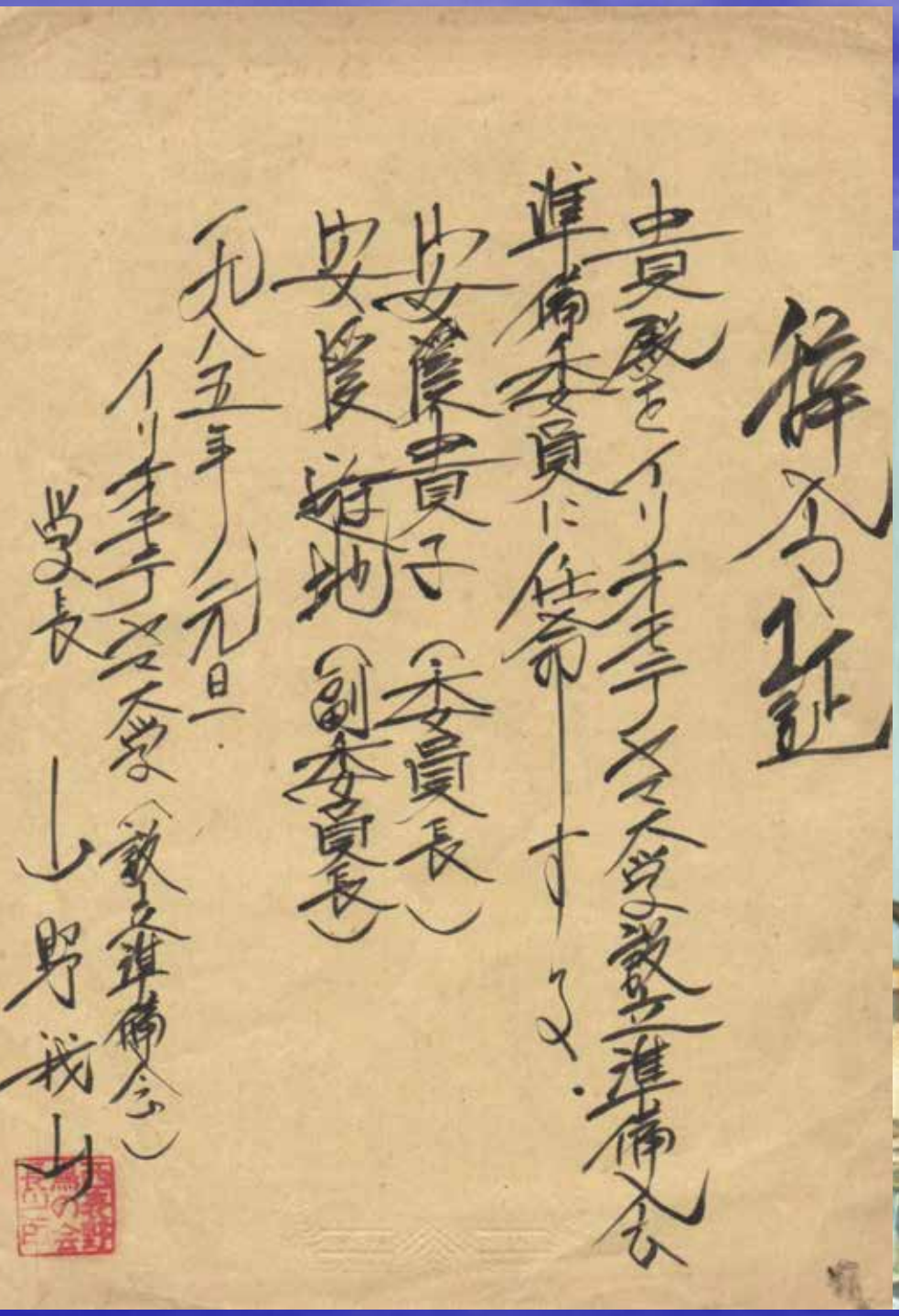
- 後半

4 西表をほり･おこす

「汝の立つ処深く掘れ　其処に甘き泉あり」（伊波普猷）
　これが、西表をほりおこす会の哲学です。

　島も人も、もちろん変わるべくして変わっていきます。でも魂は変わりません。西表島には文化力があります。これがある限り島は滅びません。先祖が代々守ってきたこの島を、いつまでもちゃんと守ります。

日露戦争従軍ラッパ


辞令証
貴殿をイリキリ会敬老準備委員に任命致す。
安藤貴子（委員長）
安良城（副委員長）
平成五年一月一日
イリキリ会（敬老準備会）
会長 山野我山

1988年11月　西表シンポで網取村訪問。
国分直一・豊見山和行・石垣博孝・石垣金星

高良倉吉さんらと　古文書研究会

祖納上村遺跡の発掘

金星人のことば（映画・生々流転）

- 西表の場合は、自然よりも人間が前に出たら、必ず人間の暮らしもおかしくなる。人間が自然を踏みつけにして自然より前に出てはいけない、というのが昔からの教え。
- これは、昔もいまもこれからも、絶対変わらんし、変えちゃいかんこと。
- 直感で島の未来はこう作るということを、やってきた。理屈はあとからついてきた。
- 祖納の場合は、五〇〇年前の歴史がわかっている。だから五〇〇年先が見えるわけよ。だから、心配はしとらん。

ヤマネコ印西表安心米の挑戦

・イリオモテヤマネコと共存できる有機産直稲作を

1477年　稲作の初記録
1986年　農薬散布強制
1989年　安心米スタート
1991年　合鴨稲作開始
1998年　借金返済終了
2006年　後継者の帰島

西表安心米生産組合
0980 85 6302

(c)安渓遊地

住まいのデパート
売るとき、買うとき、買替えるとき
八重山住宅サービスの仲介なら安心です
沖縄県知事(2)第1483号
八重山住宅サービス㈱
☎2-9971(代)　FAX(09808)2-2141

あなたの身近な話題
ニュースは本社編集
☎(09808)
2-2121
へご一報下さい。

日刊
八重山毎日新聞
発行所／㈱八重山毎日新聞　電話(09808)2-2121・2122
〒907 沖縄県石垣市石垣258番地　(月極購読千円郵振鹿児島8-11090)

ヤミ特栽米出回る

西表の無認可生産者が出荷

沖縄食糧事務所「告訴も…」と問題視

今年の一期米で、西表の一農家が沖縄県で初めて食糧庁の「特別栽培米制度」認可を受け、無農薬米の生産販売を試みたが、この認可数量（五・八トン余）を大幅に上回る六十トン余りの不正規流通米が西表の他生産者から本島地区に出荷されていたことが分かった。二十八日に開かれた沖縄食糧事務所の説明会で明らかにされたが、これに同事務所の立仙埠所長は、「今回の認可は追認という形をとったが、今後、場合によっては卸業者の許可剝奪、農家の告訴もありうる」と問題視。さらに特栽米について「認定の要件を満たせば認めざるを得ないが、推計換算では農家収入はほとんど島産米と変わらない」として、同栽培に対する農家の期待に否定的な見解を示した。

食糧庁の「特別栽培米制度」とは、農薬や化学肥料を使わなかったりするなど特別な栽培方法をとり、生産者が消費者と直接契約して販売するシステム。食品の安全性を求める消費者のニーズに応えて昭和六十三年にスタートした制度で、この制度の「認定」には生産者と消費者の契約をはじめ、取り引き数量の制限など幾つかの要件がある。

健康食ブームで、同商品は高値販売され、このため農家の収入増に対する期待が大きいが、その一方で特殊栽培の科学的立証が難しく、消費者とのトラブルや闇ルート販売の拡大なども懸念されているようだ。

西表ではこれまでにも無農薬の稲作に取り組んでいる農家があり、県や竹富町、市の行政、農協関係者を集めて二十八日竹富町農協で開かれた沖縄食糧事務所の説明会によると、今回の一期米で同地区の稲作農家十人余から「特栽米」認定の申請があったが、要件を満たさず、このため一農家に絞って五・八トン余りの数量で認可したという。

しかし今回、この認可数量以外に六十トンの不正規米が本島に出回ったとされ、立仙事務所長は、これらの状況を厳しく指摘しながら、また独自の推計換算表を示し、「輸送費や低収量などで、農家収入はほとんど変わらない。むしろ島産米で反収や品質アップを図った方がよい」と強調した。

ただ西表の稲作農家の特栽米にかける期待は大きいものがあり、今後の成り行きが注目されるところだ。

新高齢者雇用制度で研修会

31日に市民会館で

事業主および事業主団体を対象にした「高年齢者雇用問題研修会」（八重山公共職業安定所、県雇用開発協会共催）が、三十一日午後一時半から市民会館三階会議室で開かれるが、主催者側では多数の参加を呼びかけている。

研修会は高齢者雇用問題の重要性について認識と理解を深めるのが目的。八重山職安の安里清令所長が「高齢者の雇用対策について」、雇用問題の専門家である沖国大商経学部の嶺井勇教授が「高齢者の雇用問題を考える」、県雇用開発協会の安元泳恒高齢者雇用アドバイザーが「高齢者の雇用の体制づくりについて」と題しそれぞれ講話を行う。

主催者側では「社会情勢は日々変化しており、企業にとってメリットのある高齢者雇用の新しい制度を説明したい」と話している。

正美ちゃん殺害も自

琉球国建設親方・真喜志好一さんの事務所で

日本初・西表島エコツーリズム協会立ち上げ

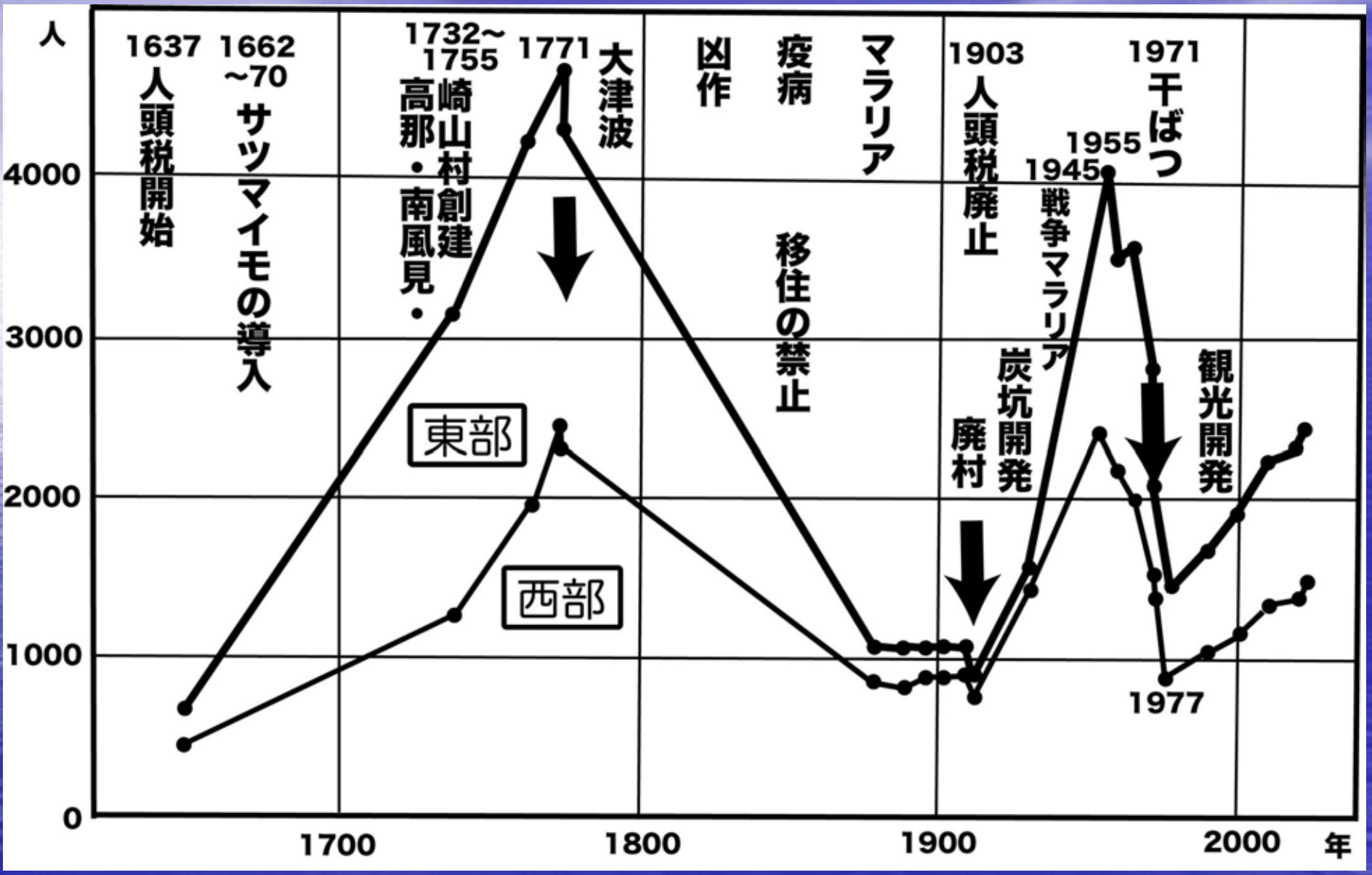
ネイチャーツーリズムがエコツーリズムだと思っている人もいますが、本当は自分たちで自分たちの地域をつくっていく運動が、たまたまエコツーリズムと呼ばれるだけでしょう。エコツーリズムは地域の自然と、その自然から生まれた文化をつくりあげていく、いわば文化運動なんですよ。その文化は自然を活用し、工芸や芸能であったりするけれど、それを自慢する行動を総称してエコツーリズムというんです。

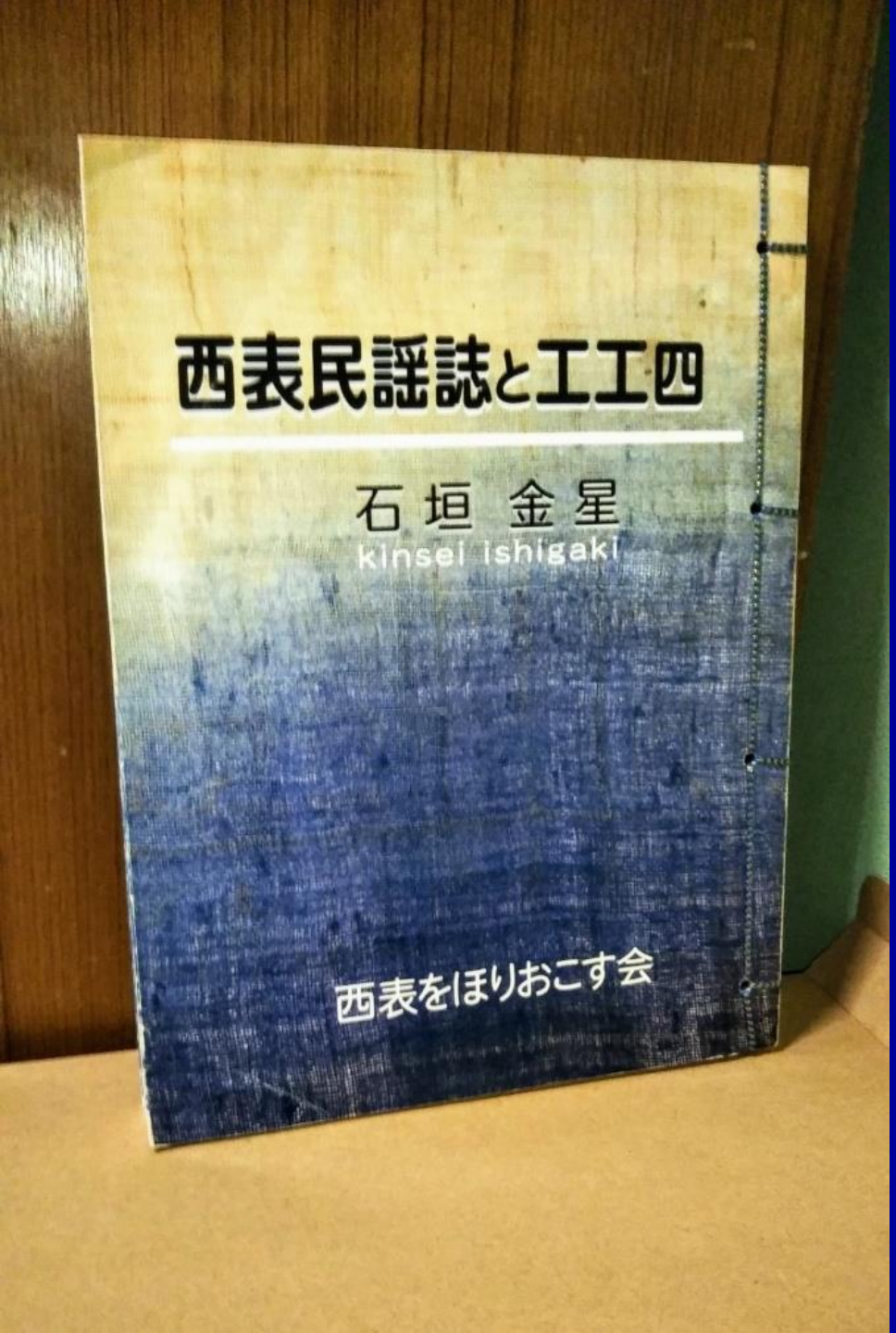
西表エコツーリズムセンターでお買い求めになれます。

昔炭鉱、
いま観光。
人口が増
えても文
化を失え
ば地域は
滅びる。

(c)仲程長治

西表島の人口変動（安渓遊地原図）





工工四（くんくんし一）

まとめるのに38年かかった。

　石垣島や首里那覇の文化による西表文化の抹殺（文化的ジェノサイド）への抵抗運動の成果

1972年沖縄の日本復帰直後のこと、島外企業がこのウナリ崎に太陽の村というリゾート施設を作った。その時リゾート企業は特別な聖地「ウナリ崎御嶽」を重機により破壊して自分の別荘を建てた。そして真向かいの美しい砂浜を「月が浜」などと勝手な名前をつけたもので、西表の歴史と文化を冒涜するもの。標識を由緒ある「トゥドマリの浜」に訂正させるのに30年かかった。

この時、破壊されたウナリ崎御嶽を見た島のある年寄りはポツリとこうつぶやいた「あれはきっといい事はない！」と。お年寄りの予言通り太陽の村リゾートは開業してまもなく潰れた。昔から言い伝えられる「カンヌトゥガ（天罰）」であった（石垣金星）。

「文化力のある島は滅びない」
石垣金星一巻選集

B5 版 176 ページ／2023 年 6 月 30 日初版

己立大地古歴史泉有

石垣金星

第一部 自然と文化を守る
第二部 西表をほり・おこす
第三部 地球人へのメッセージ

著者：石垣金星（自称〝イリオモテ原住民〟）
企画：石垣昭子（紅露工房）
編集：西表をほりおこす会（a@ankei.jp）
発行：南山舎
定価：1,650 円（1,500 円＋税）

お買い求めは、南山舎「島のものや」で

この日はタコも貝もお留守。

「なんでこんなところの写真を撮るか！？」とうんと怒られた。
（仲程長治さん談）

西表島の文化力ー金星人から地球人へのメッセージ

第1部　自然と文化を守る
第1章　歩んできた道
第2章　島おこし運動
第3章　先人からの学び
第4章　西表島を訪れる
　みなさまへ

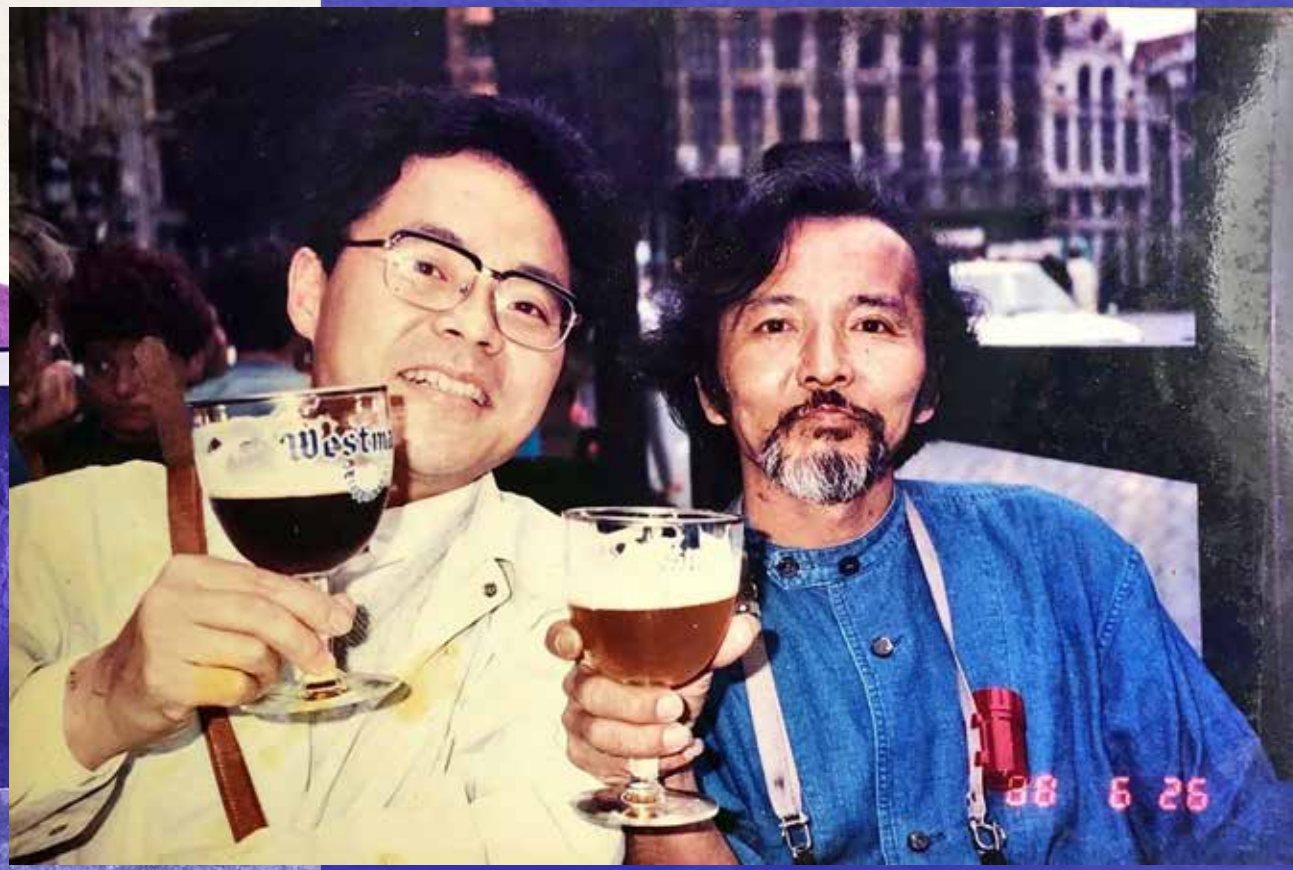
第2部　西表をほり・おこす
第5章　歴史の泉を求めて
第6章　新たな仕事をおこす
第7章　エコツーリズムは地域づくり
第8章　鎮魂と祈り

第3部　地球人へのメッセージ
第9章　神様の許可
第10章　われら琉球人
第11章　唄はシマ島の宝

編集後記ーー地球人からみた金星人

全国との交流　淡路島産の「農民車」を導入

フランス・ベルギーの旅
1988年6月



1988年　青年祭の出し物　琉装の金星人

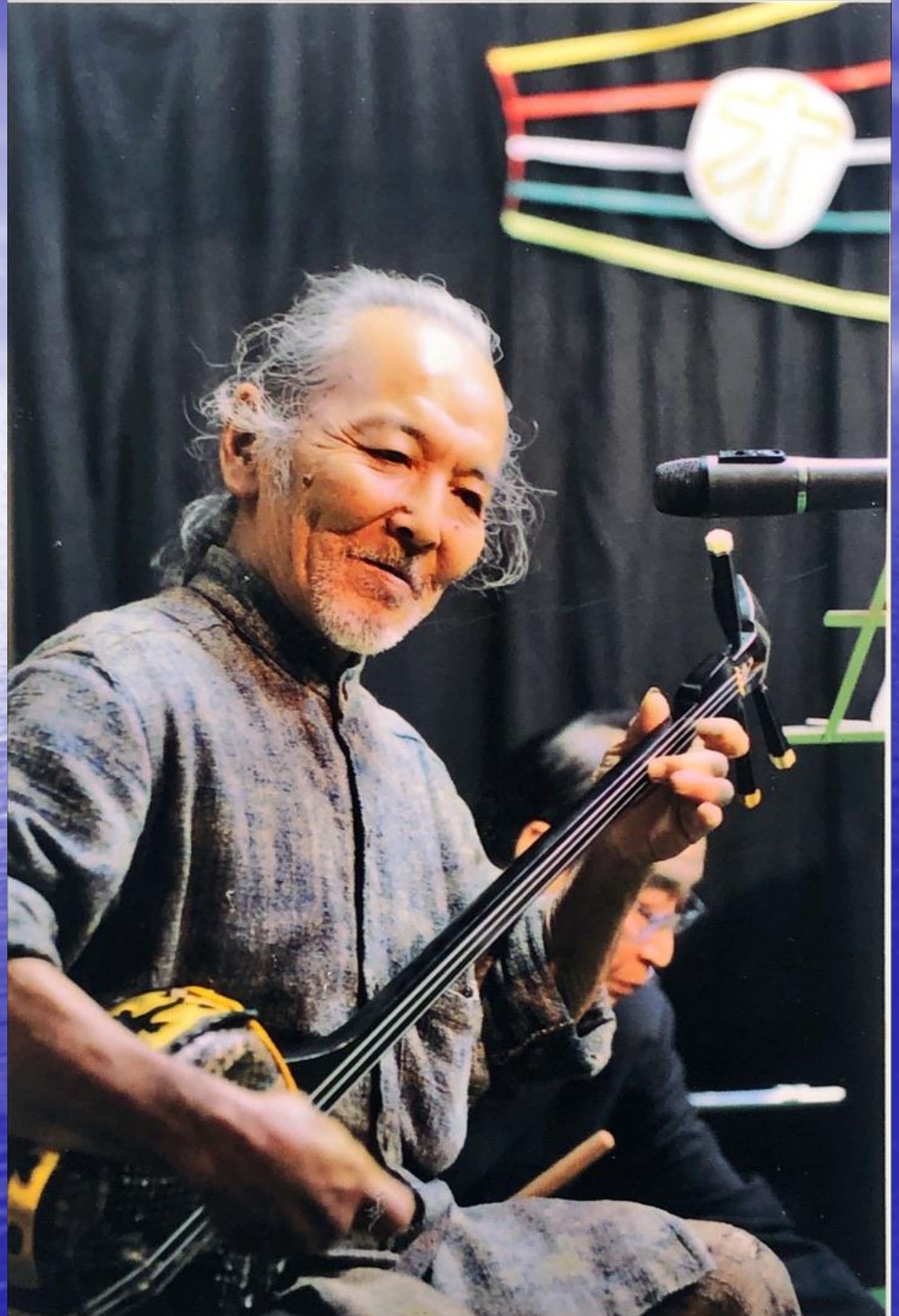
チンライ節を踊る石垣昭子さん

サバニピースボート © Heiko O. Junge

1995年5月19日　与那国島から到着した喜納昌吉とサバニピースボートをユノーンフチに迎える

台湾原住民族パイワン族との交流

1477年の済州島漂流民受け入れの史実を交流につなぐ



古い伝承を繰り返しているだけでは、伝統はやせほそってしまう。

　日々あらたな創造を重ねるのが、あるべき「健康」の姿

最高の師匠は竹富島喜宝院の上勢頭亨さん

為
法名釋卿星一周忌
南無阿彌陀佛

釈郷星（しゃく・ごうせい）　を両側で守る済州島の
「小坊主」（全京秀チョンギョンス先生が持参）
1477年12月から半年の交流で西表が歴史に登場

結論　未来へむけた歴史実践のために
西表島をほり・おこしつづけた、石垣金星さん（西表をほりおこす会）に学ぶこと

0．ここが世界の中心。交流と情報発信

1．地域を「ほる」と「おこす」のバランス

2．住民と地域研究者が手を結ぶ可能性

3．伝統に学んで芸能と祭りを再創造

「ほる」＝過去と現在をつなげること

「おこす」＝現在を未来につなぐこと

ばはだんぬ　ぱなし　しきおーらりってい　しかいとぅ　みーはいゆー

ご清聴ありがとうございました。